王冠の椅子

緋絽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王冠の椅子

【Ｎコード】
Ｎ１５８５Ｕ

【作者名】
緋絽

【あらすじ】
現代と変わらぬ技術のある世界――――。
しかし、政治は唐の制度をそのまま用いており、王族も存在する。
身分の差別をなくすために、最下層の２人が立ち上がる！！
※ＢＬと設定していますが設定上そう見えるだけです。実際は異なりますゞ（≧∇≦）

念の為、制度と世界観（前書き）

新作です！よろしくお願いしますm（＿＿）m

念の為、制度と世界観

制度

皇帝（クラウン・金）

門下省　尚書省　中書省

（各省　鍵・金）

吏部（鍵・赤）

戸部（黄）

礼部（紫）

兵部（青）

刑部（黒）

工部（緑）

官僚の人事を司る

財政を司る

礼制と地方交易を司る

軍事と外交を司る

司法と警察を司る

公共工事を司る

※教育・倫理

※医療関係

すべて

御史台　府庫

禁軍

左　右

軍　軍

世界観

王室（皇帝・王族）

貴族層（正式名・第1層）

？

平民層（正式名・第2層）

？

最下層

我が背の君（前書き）

やっと本編！！いきます！！

我が背の君

「お兄さん、どう？楽しいわよ」
紅い口紅を塗った女が俺の腕に腕を絡め体を引っ付けてきた。
咽せるような濃い香水の香りが鼻孔に広がる。
「止めときなよ、その子、最下層の子よ。お金持ってないわ」
もう1人、同じように紅い口の女が薄ら笑いを浮かべて言った。
それを聞いて微笑する。
俺の顔を見た女達が息を呑んだ。
女の腕を掴んで後ろに捻りあげた。そのまま腰を引き寄せる。
「痛……っ！！」
「お前らだって同じだろう、売女が。悪いが俺はいつまでもここにいる気はない」
「離して……っ！！」
女が身を捩らせる。
腰に巻きつけた腕に力を込めて身動きを取れなくさせた。耳元で囁く。
「俺は上に行く」
女を突き飛ばして歩き出す。
「何よっ、そんなの幻想だわ！！あんたなんか絶対上になんて行けない！！」
女の声はすぐに雑踏にかき消された。
家に近づくにつれて人混みが減り、普通なら吐くような匂いが漂い始める。
腐臭に似たすっぱいような、けれど生ぬるくて体中に張り付くようなネットリとした匂いだ。
そこをさらに奥に進んでいく。
「志紀（しき）っ、こっち来てくれっ！！」
和貴（かずき）が手招きして俺を呼んだ。

かなり急いでいるようで、何があったのか瞬時に判断できた。
「負傷した奴は？」
石垣を飛び越えて和貴の隣に駆け寄る。
「今確認した数は３人。あいつら石で殴ってきやがった！！」
石か……。
「目には目を、歯には歯を、だ。相手は何人いる？」
「５人！！」
手頃な石をいくつか掴んでその場所に向かう。
建物の影に潜んでその状況を伺うと５人くらいの少年達がその場にいる６人を拳ほどの大きさの石で殴りつけていた。
間違えば死ぬということがわからないらしい。
こんな場所にノコノコと出てくるくらいだから、精々平民層の子供なのだろう。
こちらの子供は痩せ細っているにもかかわらず、相手の子供は健康的に太っている。
驚くほどの体格の差だ。
状況を知らない奴が見たら口を開けているに違いない。
けれど、ここではそれが当たり前なのだ。
石を空中に投げて落ちてきたそれを掴む。振りかぶって今まさに殴りつけようとしている子供に向かって投げた。
ビシッと音を立てて手に当たる。
「痛ぇっ！！」
周りの４人がざわつく。
その４人にも石を投げた。
小さく悲鳴が上がりパニックになっている間に走り出て５人の持っている石を奪った。
しばらく５人は呆然とし、その後ハッと我に返った。
「な、何すんだよ！！」
真っ先に気づいた少年が俺を睨んだ。
和貴が殴られていた奴らを引っ張っていく。

それを確認してから口を開いた。
「なあ、この石にこびりついてる赤いのって何か知ってるか？」
半分バカにしたような口調で話しかける。
「知ってるよ、血だろ！！」
頷いて石を空中に投げて落ちてきたのを掴む。
「じゃあ頭に当たったらどうなるか知ってるよな？」
「血が出るだけだろ！！」
何度目かの落ちてきた石を掴んで少年達をじっくりと見た。
「ブー。残念でした」
相手が苛ついたのがわかる。
振りかぶって石を投げた。相手の額に当たる。
「うわっ……」
「あんたら第2層だろ。大丈夫かよ。こんなの最下層なら5歳児だって知ってるぜ」
いや…むしろ最下層だからか。
少年の頭から血が流れ始める。
「うわぁ！！血だ！！」
相手が慌てている様を見て口角をあげた。
こんなもので騒ぐなんて、笑わせる。自分達がやろうとしていたことじゃないかよ。
「落ち着け。正解を教えてやる」
少年の額に触れるとヌルリとした血が付いた。
少年が痛みに顔をしかめる。
「死ぬんだ」
みるみる少年の顔が蒼白になっていく。
「あ…」
恐怖からか声と体が震えている。
「早く治療しないと大変なことになるぜ」
クスリと声を立てて笑うと少年が息を呑むような悲鳴をあげて後ずさった。

血の付いた手で少年の頬を撫でる。
絵の具をつけたように赤い血が頬にへばりついた。
「死にたくなければ、二度とここへ足を踏み入れるな」
少年を軽く押すと弾かれたように走り去っていった。他の４人も後を追う。
悲鳴が遠ざかってから家に向かった。

――――その志紀をどこかで見ている奴がいた。
風に背中のフードがバサリと揺れる。
「へぇ…あいつが…」
その者は立ち上がると大きく息を吸った。
「それでは、いざ、我が背の君のもとへ」
深くフードを被った。

我が背の君（後書き）

割と明るさはこんな感じでいきます！！
ガッツリ暗いです！！

背主（前書き）

く、暗い…。
今回は少し読みづらいかもしれません…。
すみません！！m（＿＿）m

背主

家――――施設に戻ると和貴達が俺に気づいて手を振った。
それに手を挙げて応える。
「終わったのか？」
「ああ」
脱脂綿を酒に浸し、軽く絞って和貴に渡す。
和貴がそれを見て首を傾げた。
「？なんだよ」
「膝、すりむいてるぞ。破傷風になったら面倒だ、拭いとけ」
和貴が僅かに目を見張った後、はにかむように笑う。
「バレたか」
おどけたように舌を覗かせた。
和貴に脱脂綿を押し付けてソファに座る。
「平民層の奴らは？」
「帰った」
「…お前ヤバいんじゃないの。平民達、強そうな奴連れて仕返しに来るかも」
「大丈夫だ、来ない。来るとしても、自分は来ないさ。殺されたくないからな。それに、その前に昇試に受かる」
「そっか」
和貴が安堵の溜め息を漏らす。

この国は４層に分けられている。
まず、最上層は皇帝、王族に分けられる。
皇帝は、王族ではない。なぜなら王族は政治不介入だからだ。
皇帝は、多数いる官吏から選ばれる。国民ではなく、官吏によって。
つまり、王は別にいるが、実質王と呼ばれるのは〝皇帝〟なのだ。
人々はこの時代を、偽帝時代と呼ぶ。

中国の三省六部（さんしょうりくぶ）制をそのまま利用している朝廷は、ほとんどが己の欲のために動いている。
大抵が貴族と平民で、最下層は官吏になれない。特例を除いて。
その下が第１層、別名貴族層だ。朝廷の半数は貴族だと思ってもいい。自分の身分と誇りを何よりも大事にし、官位を金で買う奴らだ。
そしてその下が第２層、別名平民層。
その名の通り平民。欲のために人に取り入ることを得意とする。
そして無知。飢餓の恐ろしさや石の怖さを知らない。
これは最上層、第１層にも言えるが。
――――さらに下、最下層。
ここは奴隷、その子供、孤児が分けられる。
ゴミ溜めに住み、食料が得られれば幸運だと教えられる場所。
学舎がないのでほとんどが文字が読めず、さらに穢らわしいと国試も受けられない。
国試は、官吏になるための試験だ。
ただ特例がある。
――――孤児。
孤児は親のいなくなった者で、奴隷だったわけではないということで平民層に上がるための昇試を受け、受かれば国試を受ける権利が手に入る。
今まで誰も受けようとしていないみたいだが、俺はそれを受ける。
必ずこの不条理な差別を終わらせる。
簡単ではないが、こっちだってかなり勉強した。
強く指を握り込む。
「――――じいさん」
孤児のために特設された施設の奥、その部屋のカーテンを払いのけて中に入った。
黒髪に白髪の混じった見た目６０～７０ぐらいの老人が胡座をかいて座っていた。
「もうすぐ昇試だ。また教えてくれ」

「もう充分、お前は学んだと思うんだがな…」
老人が苦笑して招き入れると、俺の後ろに和貴がついてきた。
床に座ってじいさんの話に耳を傾ける。
じいさんは元官吏で、最下層のことを知り、変えるために動き、皇帝に目を付けられ、免官させられたのだ。
官吏だっただけあって、知識が豊富で、教えてもらうには最高の指導者だった。
ふとじいさんが話をやめた。
「何だ？」
「お前、背主はどうする」
背主は、試験・受かれば仕事の相棒となるバディーのことだ。
チラリとじいさんが和貴を見た。
「これから捜す」
「ふむ…お前なら真っ先に和貴を連れていくと思っていたが…。私も和貴が一番いいと思うぞ」
気付かれないように和貴に目をやる。
俯いて俺の答えを待っている。
和貴が、俺と一緒に官吏になりたがっているのは知っていた。
和貴も、あと少し勉強すれば合格するだろうとは思う。
でも――――。
「和貴は駄目だ」
和貴が息を詰めて俺を見たのがわかった。
「なんで…」
「お前は、駄目だ」
和貴の目を見ずに言う。
和貴が顔を泣きそうに歪めているのがわかる。
「なんでだよ志紀！！俺、絶対お前と一緒にこの国を変える！！お前とならできるって……！！」
「駄目だ」
遮るように言って立ち上がる。

そのまま部屋を出て外に行った。
追いかけてきていた和貴が戸の前で立ち止まったのがわかった。

背主（後書き）

フードが出てこない…！！

Partner（前書き）

やっとフードが出ました…！！遅いよ！！

Partner

さぁ、急いで背主を捜さなきゃならない。
施設から出た俺は別の施設に向かって日陰の道を歩いていた。
倉庫ほどの高さの建物が続けている。
ジメジメしている上に腐臭がつーんと鼻をつく。もう慣れたから何も感じないが。
歩きながら深く考え込む。
信用できて試験も受かるほど勉強もしっかりできた奴…。
奥歯を噛み締める。
そんな奴、ここにはいない。
今から勉強させるには時間がなさすぎるし…。どうする。
「あ、君、志紀？」
突然声が聞こえて振り返った。
後ろの道には――――誰もいなかった。
「誰だ。姿を見せろ」
突然暗かった足元がさらに陰る。
――――と建物の屋根から急に人が降ってきた。
「志紀なわけ？」
「……誰だ」
黒いパーカーのフードを目深く被り鼻の頭から下しか見えない。
「俺は綾（りょう）。会うのは初めてかな」
「どうして俺を知ってる？」
綾という少年が何か含んだように笑った。
「ここであんたを知らない方がおかしいよ。君、有名人だから」
綾がわざとらしく肩を竦める。
「…目的は？」
最下層で見知らぬ奴が話しかけてくる時は、何か目的がある時だ。
金か、はたまた、俺の命か。

平民に雇われた奴だろうか。
見たところ、そんなに力があるようには見えない。速さがあるのか。
何にせよ、用心するに越したことはない。
「何を企んでる」
「企んでるって。人聞きの悪い」
その言葉を流して眉を顰める。
俺の顔を見て溜め息をついた。
「さっきみたいに笑ってくれないかな」
「…見てたのか」
「まぁね」
綾が人当たりのいい笑顔を向けてくる。
嘘っぽい笑顔だ。
「あぁ、そう。君、昇試受けるんだって？まさかこんなラッキーがあるとはね」
「…それで？」
警戒しながら気付かれないように後ずさる。
「取引しようじゃないか、志紀」
それみたことか、と心の中で思った。
また一歩下がる。
ヤバいことならすぐに逃げ出せるように――――。
「取引？」
「そう」
綾が再び笑い――――気に間合いを詰めてきた。
思わずのけぞる。
「――――俺を背主にしてくれ。俺も君を背主にする。大丈夫、俺今まで勉強してきたし、そこらへんは心配ご無用さ」
背主という言葉に眉を顰める。
「どうやらあんたには背主いないみたいだし。あんたにとっても好都合だと思うけど？」
確かに、そうだ。

こっちも急に出てきた希望に驚きながらも、喉から手が出るほど欲しいと思った。
けれど、本当に信用して大丈夫か？
もしかしたら平民が金を払ってこいつに俺が昇試を受けるのを邪魔させようとしていることは？
有り得ないことはない。――――むしろ、大有りだ。
「おいおい、変な勘ぐりはよしてほしいね。するだけ無駄だし。怪しい者じゃないよ？金ももらってないし」
綾がげんなりしたように肩を落とす。
「何故、昇試を受ける？」
俺の問いにふと綾が一瞬固まった。
短く息を吐き出す。
「……俺はね、こんなところからさっさと抜け出したいんだよ。金をたくさんもらって、明日の自分の生死に怯えなくても済む場所へ行きたいんだ。登りつめて、最高にうまい飯を、腹一杯に食べてみたい」
その言葉には生々しいまでの欲望が滲み出ていた。
それは、最下層の者なら誰しもが持つ願い。
けれど、俺は「登りつめる」という言葉に眉を上げた。
駄目だ。こいつと一緒だと、俺の道をいずれ邪魔する。
「残念だが別の奴に――――」
「そこは秘書でも構わない」
言い掛けていた言葉を止めて綾を見る。
「君、皇帝目指してるんだってな。その秘書、側近ならかなり高額な給料が貰えるんじゃないの」
「お前…」
俺の顔を見て綾がクスリと笑った。
「お互い、その夢のために協力しようじゃないか、志紀。君が背主になってくれれば後は実績を積めば昇格できるし、そうすれば君の企み事に手勢として入るよ。協力する。どうだ？」

悪い考えじゃない。
協力者がいるのはかなり助かる。
しばらく考えた末、俺は差し出された綾の手を取った。

Partner（後書き）

綾君は書いていてとても楽しいです！

施設にて（前書き）

今日は短いかも…

施設にて

施設に入る前、俺は綾を振り返った。
鼻歌を歌ってご機嫌な綾が首を傾げる。
「…それ、脱げ」
「は？」
「フード」
俺の言っている意味がわかったようで被っているフードを摘む。
「悪いけどコレ、俺のチャームポイントだから嫌」
「チャームポイントってなんだよ。怪しいな。俺お前の顔知らないんだけど」
綾が肩をすくめる。
「知っててもなくても変わらないだろ」
「脱げ。背主止めるぞ」
「なんて奴だ君はーーっ！！血も涙もない！！」
「大いに結構。俺はいざとなれば1人でも受ける」
「どうすんのさ、それ」
綾が肩を落とす。
「まぁ、いいか。美しすぎて倒れても知らないよ」
「そこらへんは心配してない。脱げ」
「酷いなー」
バサリとフードが落ちる。
肩より少し短い髪を後ろで括っていた。額に血の滲んだ後がある。
中性的な顔立ちで、少しつり上がった目が面白そうだと物語っている。
なかなか綺麗な顔をしている。
「…それ、どうした」
額を指差して訊く。
「え？あぁ傷？さっき君が平民相手に喧嘩してた時、流れ弾…じゃ

なくて流れ石が当たってさ。不覚にもね」
少し痛むのか顔をしかめた。
「君に夢中になりすぎた」
「素敵なラブコールだな」
戸の取っ手を掴んで開け、綾を中に入れた。
「はー施設ってこんななのか」
綾が珍しそうに周りを見渡す。
「…そういえばお前、奴隷でもないのに、どうして施設にいなかったんだ」
国試が受けられるってことは奴隷ではない。でも孤児なら施設にいるはずだ。それなら俺が知らないはずがない。
綾が一瞬黙り込んでから顔を上げた。
どこか痛むような笑顔。
「あいつらの思い通りになってやるものかって思っただけだよ」
「あいつら？」
「上の人間さ。平和ボケしたね」
綾が肩をすくめる。
「へぇ」
「聞いといてなんだその反応はー！！」
「深く聞くと面倒そうじゃん、今の」
「うっ。なんて淡々と答える奴なんだ」
綾が衝撃を受けたように僅かに仰け反る。
「――――志紀じゃないか。帰ってたのか」
声のしたほうを向くとじいさんが俺を見て笑っていた。
「あぁ、じいさんか」
「隣の子は？見かけない子だが…」
じいさんが体を折って覗き込む。
「あぁ、こいつは…」
「初めましてご老人。俺は綾です。この度志紀の背主になりました」
「…あ、あぁそうか。…俺？でも君…」

「ご老人、何か引っかかっても気になさる必要はありませんよ」
ニコニコと人懐っこく綾が笑う。
それを見ながら俺は思う。
嘘っぽい。嘘で塗り固められているように見えて仕方ない。
「そうかね？まぁ、ゆっくりしていきなさい」
「はい」
綾が小さく会釈する。
じいさんが奥に引っ込んだのを見ると俺は綾の手を掴んで古ぼけたソファに座らせた。
「わっ何！？」
脱脂綿を酒に浸して搾ると立ち上がろうとしている綾を押さえて隣に座った。
後頭部を掴んで脱脂綿を額の傷に当てる。
「痛っ」
少し体を動かした綾の目を見た。
「我慢しろ。ほっといたお前が悪い。動くなよ」
「う…」
再び脱脂綿で血を拭うと新しい脱脂綿を当てて固定した。
「終わったぞ」
「どうも。うっわー俺愛されてるぅ」
ソファに座った綾がカラカラと笑う。
「破傷風になられたら面倒なだけだ。いざとなれば俺はお前を捨てられるよ」
「ふうん？」
綾が額の脱脂綿を触りながら相槌をうった。
その時、ガタンと音がしてそっちを見ると和貴が立っていた。

施設にて（後書き）

なるべく定期的にｕｐしていきたいです…

わからない気持ち（前書き）

更新、遅くなりました…（^。^；）
期末考査がありまして…（・∀・）
今回わりと短めです

わからない気持ち

落ち込んだように俯いている和貴から俺は目を離せなかった。
理由なんてわからない。ただ、心臓が、その奥がキシキシと軋んだ音を立てている。
ふと顔を上げた和貴が俺を捕らえる。
思わず、身じろぎをした。
「あ…志紀……。俺やっぱり一緒に昇試受けたい…」
歩み寄ってくる和貴が足を止めた。
和貴の目が綾を捕らえる。
「誰？」
綾が口を開いて言葉を発する前に被せるように言った。
「俺の背主になった綾だ」
目が見開かれる。
愕然としたようにぶらりと手を垂らしてしばらく何も喋らなかった。
ようやく震えた声が返ってきた。
「背主…？」
和貴の目を見ずに答える。
「そうだ」
突然胸に咽せるほど強い衝撃がきて胸倉を掴まれたことに気付くのに少しかかった。
「なんで！？駄目だって言っても…っ、志紀なら許してくれるって…！！」
「俺が今までそんなことした覚えがあるか？駄目と言ったら、それが全てなんだよ」
和貴の顔がクシャリと歪む。
「そ…うだけど…っ！！」
目を見ずにそのまま和貴の手を掴んで指を解こうとすると強く払われた。

払われた手を他人事のように見て、その向こう側に唇を噛んだ和貴が見えた。
「もういい！！結局…っ、志紀は自分のために行くんだな！！」
突き飛ばされソファの背もたれにさらに深く倒れる。
和貴が施設の戸を大きい音を立てて閉めた。
「……なんで…そうなるわけ…」
綾の引きつったような声が聞こえた。
綾が俺の顔を見て溜め息をつく。
「志紀、あのね、こういう時は追いかけるんだよ。呆けたまま座ってても何も変わらないんだからね」
「……」
もう一度溜め息をつくと綾が俺の目の前で手を降った。
「君、さっきいざとなれば俺を捨てられるって言ったけど、その理由がようやくわかったよ」
呆れたような顔をして俺の前髪を払う。
その手を振り払った。
「……うるさい」
「ハイハイ。君の性格はこの短時間でよくわかった。なんて天の邪鬼な奴なんだ」
綾が溜め息をついて立ち上がってフードを被った。
「じゃあね」
戸の閉まる音がやけに大きく聞こえた。

ソファに寝転がると埃が舞い上がって光に反射する。
目を閉じた。
言いたいことが喉をついてこなかった。
悶々と胸の中で巡っている。
…和貴にはいつも大切なことは言わなかった。
言わなくても通じていた。

でも今は――――。
どうすればいいかなんてわからない。
「志紀っ」
施設に1人の子供が駆け込んできた。
「どうした？」
体を起こすと子供が傍に来て息を切らせながら俺の膝にすがりつくようにしゃがみこんだ。
「おい、何があった」
肩を掴んで軽く揺らすと、苦しそうに顔を歪めて話し出した。
「か、和貴が…っ、平民におそ、われて…っ」
体に冷えた水をかけられたような感覚に捕らわれた。指の先まで凍ったような、そんな感覚に。
「襲われた…？」
「どうしようもなくて…それで、志紀を」
立ち上がって施設を飛び出した。

わからない気持ち（後書き）

なかなか最下層から抜け出せない…。
あと数話で行くんじゃないでしょうか！！

表情（前書き）

今回、めっちゃ短いです！
すみませんm（＿＿）m　orz
次話で最下層編は終わりです。

表情

しなやかに動く体に平民達はついていけていなかった。当然、俺――和貴も。
俺よりも遥かに小さいその体の、どこにあの強さがあるのか。柔軟性と俊敏で高さのある跳躍。
思わず相手が弱いのかと勘違いしてしまいそうな、そんな強さ。
最後の1人が吹っ飛んだ。
「とっとと帰れバーカ！！」
綾に、こてんぱんにされた平民達が逃げ帰っていく。
綾が俺を振り返ってズカズカ歩いてきた。
「何・・・っ」
目の前にきた綾が屈んで俺の前髪をかき上げる。目蓋を擦られてジクリと痛んだ。
「あーパックリいっちゃったな。痛そー」
石が目蓋に当たり、それがわりと鋭かったため、目蓋が切れたのだ。
顔が熱くなる。
自分は怪我しなかったのにと、言いたいのか。そうだ、闘わなくてもわかる。俺よりこいつの方が強い。
最下層を出て、第2層以上に行くには強い奴が必要だ。それなら俺なんかより、綾の方が相応しい。
唇を噛む。
くそ、悔しい。ずっと、――――ずっと志紀の隣は俺だったのに。
「そう思うなら触るなよ」
綾の手を払って歩き始める。
後ろでふん、と鼻で笑った声が聞こえた。
「あんた、何もわかってないんだな」
「は？」
その言葉にムッとして振り返る。

優越感で歪んだ笑いになっているだろうと思われたその顔は――――
思惑と外れて、羨ましそうな優しい笑顔だった。
「今まで何を見てきたわけ」
「何が…」
「志紀だよ。未だにあいつが自分の為に官吏になると思ってるなら、あんたの目は節穴だね」
「なっ…」
言い返そうと口を開きかけて噤んだ。
何か違う気がした。
「もしかして本当は気づいてるわけ？」
志紀の声が聞こえて声の方に振り向いた。
必死で、俺を捜す声。
「……あいつさぁ。いざとなれば俺を見捨てられるって言ったんだよ」
「……え…」
綾が俺を見て唇の端を上げて笑う。
「それが何の為か、君ならわかるでしょ？」
「和貴！！」
志紀がその場に飛び込んできた。
俺を捜してるのか？
「ほら、行った方がいいよ。素直になるのはいいことだ」
強く背中を押されて建物の陰から体が出る。
志紀が荒い息をしながら俺を見た。
「あ…し、志紀…」
固まったように俺を見ていた志紀の指がピクリと動いた。
ほっと志紀の表情が緩む。珍しい。こんな顔をするなんて……。
「お前…平民は…」
「俺が撃退してやった」
綾が陰から出てきて大きく伸びをする。
「なんか、１対１０くらいだったから楽勝だった」

「…そうか」
「あれっお礼なし？」
綾がずっこけたフリをした。
「…どうして、助けてくれた」
志紀をしばらく見つめてから綾がふわりと笑った。
綺麗な顔が艶やかに笑う。
そういえばこいつ、容姿も志紀と釣り合うんだよな、と関係ないことを思った。
「あんたには借りがあったからね。返したけど」
額の脱脂綿に触れて、手を下ろす。
短く息を吐いてからフードを被って歩き出す。
「っ、おっ、おいっ」
後ろを向いたまま綾がヒラヒラと手を振った。
「じゃあな」
綾の背中を俺と志紀はしばらく見つめていた。

表情（後書き）

次話はもうちょっと長くできるといいな！！

不条理な世界へ（前書き）

み、短い…！お待たせしました！それなのにこの短さ！卑屈になりそうです☆

不条理な世界へ

――施設で俺は志紀から手当てを受けていた。
志紀が脱脂綿の上をゆっくりとなぞる。
「痕、残るかもな」
「……うん」
ちらりと志紀を見ると、いつものような仏頂面に戻っていた。
感情の読めない、仮面。
怒ってるのかな？
「あ、あのさ志紀」
「ん？」
「……ごめん。本当は俺達の為に官吏になってくれるって…わかってたんだ。だけど…今まで俺と志紀はいつも一緒だったから…だから背主になれば、またずっと一緒にいられるって…思って…」
「……」
無言で俺を見つめている。少し、肩身の狭さがきつくなる。泣きたくなってきた。
「…ごめん…。寂しかったんだ…。甘かった…。そんなんでついていける世界じゃないのに…」
俯くと涙がこぼれそうになった。
少し前、志紀に八つ当たりした自分が恥ずかしい。
唇を噛んだ。
よくもあんなことが言えたものだ。下手をしたら足を引っ張ってしまうかもしれないのに。――けれどそれより、志紀に見放されるのが怖かった。
呆れられたくない。
――と頭に手がのった。
驚いて顔を上げると志紀がぎこちなく笑っていた。
「…いいよ…、俺だって…言葉が足りなかったし…」

「…志紀…」
「俺はお前が背主でもやっていけるとは、思う。だけど、俺とお前がここを離れたら一体誰がここの奴らを守るんだ？」
あ…そうか。
「俺は、和貴なら皆を守れると思ってる。……俺は外から世界を変える。だから、お前には中から変えてほしい」
未来を絶望するのではなく、明るい希望を。「持ちたい」ではなく、「持つ」へ。そうしてもいいのだと、中と外から意識を変える。
なんと乱暴な方法か。はさみ打ちだな。とても、志紀らしい。
知らず知らず笑みが浮かぶ。
「うん、わかった」
「……頼む」
「志紀は言葉足らずだな。いきなり駄目だって言ったら混乱するに決まってる。あれ、俺悪くない気がしてきた」

志紀が傍目には気づかないだろうが、少しブスッとした顔になった。
「今までは通じてた」
「今まではね。でも志紀、外へ行ったらもう、それは通じないんだよ。少し練習していかないとね」
拗ねたようにそっぽを向く。
「志紀、頑張ろうな」
ちらりと俺を見て微笑んだ。
「あぁ」

俺と綾が受ける試験は昇試→会試→殿試の順に行われる。
あれから１０日後、昇試を受けた俺達は余裕で通過しさらに１ヶ月後の会試に備えることになった。
ただ、平民になったから今すぐに最下層から出なければいけない。
「……志紀ぃぃ」

施設にいた子供達がぐずりながら周りに群がってきた。
「……次会うまで、死ぬなよ」
「うん…」
少ない荷物を担いでじいさんの方を向く。
ボロボロな古い紙片を差し出してきた。
「一応私の住んでいた家だ。よかったらここで暮らしなさい」
「どうも」
「志紀、頑張れ」
和貴がクシャリとした笑みのまま言った。
「……あぁ」
歩き出そうとしてふと立ち止まる。
和貴が訝しげに眉をひそめた。
「ありがとな」
ちょっと笑って歩き出す。
戸の傍にもたれていた綾が隣に立った。
多分、これから先、俺が感謝の気持ちを抱くのは和貴だけだろう。
冷え切っていたものをゆっくり溶かしていった。
あの明るさと人懐っこさに幾度助けられたろう。
ふわりと風が吹く。
第2層への門を一歩跨いだ。

不条理な世界へ（後書き）

この章はこれにて終了！次回から第2層の章、スタートです！（どの層も関係なく出てくるけどね！）

第2層にて（前書き）

お待たせしました！

第2層にて

第2層は最下層と違って腐臭が漂っておらず、草木が綺麗に整えられながら生えていた。
門を一つ挟むだけでこんなに違うのか。
道の端にこじんまりとした花が咲いている。
花なんて芽を見つけたら取り合っていた。
「本来花は愛でるもの何だろうけど、そんなこと、あそこでは…」
綾が呟く。
考える暇なんて、なかった。毎日を必死に生きていた。明日まで生き延びることができるのか。冷たい亡骸として、横たわってはいないか。本当に、必死で――――なのに、ここはそんな恐怖からほとんど完全に切り離された、ぬるま湯に浸っているようだ。
怒りが沸々と静かに湧き上がってきた。
指を強く握り込む。
しばらく目を閉じていたら、すぐに怒りは虚無を纏った焦燥感に変わった。
何を今更。
この国はそういうものじゃないか。それを変えるために官吏になるんだろう。
細く長い溜め息と共に渦巻くものを押し出した。
じいさんの住んでいた家はなかなか広く、ひょっとすると一番力があった家だったんじゃないだろうか。
その家もかなり放っとかれたらしく、蜘蛛の巣や埃が張り巡らされている。
戸を開けると砂埃がゆっくり舞い上がった。
「うわー、人の住むところじゃないねぇ」
綾が払うように手を動かす。
窓を開け放すと暖かい日差しが差し込んできた。

綾がいろんな部屋の戸を開けて中を確認している。
部屋の物はほとんど動かされていない。
大量の本とテーブル、椅子、フローリングの床。
それ以外は見当たらない。
「おっ、志紀！！掃除用具見つけた。うわ、けどこれも蜘蛛の巣ひっついてる。まぁいいか。志紀、ほら」
綾が箒を投げて寄越す。
受け取ると蜘蛛の巣がぶら下がったままだった。
引きちぎって床に捨てる。
「今日は大掃除だな」
「じゃあ志紀はそれで掃いていってね。俺は布で拭いていくから」
手っ取り早く綾はそこらにあった布を水で濡らした。
水が出るのか。
平民でも管さえつながっていれば水はすぐに使えるんだな。
最下層では、自然に湧き出る水源があったからそれを汲んで使っていた。
あとは第2層への門の近くにある平民用の蔵に酒を盗みに入っていた。
いつも和貴を連れ立って見張りの目を盗んで取っていた。
今思えば、何故最新式のセキュリティーシステムを使ってないんだろうか。
箒で天井の埃から落としていく。
蜘蛛の巣を払って床に落ちた埃を掃き集めるとかなりの量が集まった。
「す、十数年分って感じだな…」
綾が冷や汗をかいて言った。
「掃除機ないのかな」
「さぁな。外に出すぞ」
「あぁ、うん」
戸を開けて埃を吐き出そうとした時――――目の端に何か飛んでくる

のが映った。

第2層にて（後書き）

やっと第2層編です！

皮膚を裂いた物（前書き）

お待たせしましたー！

皮膚を裂いた物

飛んできた物を咄嗟に手を出して受け止める。
「どっか行けゴミ！お前らのせいでここが汚れる！」
声の方を向くと15歳くらいの少年がこっちに向かって怒鳴っていた。
同じように眉を吊り上げこちらを睨んでいた。
その目から見てとれる憎悪と侮蔑の激しさに背筋が冷えた。それと同時に心臓のあたりがスゥッと醒めていく。
何故そんなにも俺達を忌み嫌う。
まるで害虫のように扱われるのは何故だ。
歯軋りをするとズクリと手の平が痛んだ。それに気づいて手を見ると鋭利な鉄材が皮膚を裂いていた。手の平が赤く濡れている。胸の前まで持ち上げると一筋手首へと垂れていった。
「志紀、どうした…」
綾が出てくるのと少年達が再び振りかぶるのはほぼ同時だった。
家の中に綾を突き飛ばして戸の陰に身を隠す。
同じような鉄材が数枚戸にぶつかり、地に落ち、その内の数枚は中に飛び込んできた。
慌てて避けた綾を引き寄せて抱え込み戸の陰に隠す。
「うわっ、なんだ…っ」
腕の中の綾の目が俺の手を捕らえた。
綾の服の肩の部分に血が滲んで赤く染まる。それを防ごうと手を離すと床に滴った。
「志紀、君、それ…」
綾の顔の横に手を伸ばして壁に刺さった鉄材を抜く。両の手の平から血が滲み始めた。
「志紀！」

戸を開けて外に出ると去りかけていた少年達が振り返った。
底から沸き立つような怒りを感じる。あまりの激しさに、震えるような息を吐いた。
何故、何もしていないのにこんな風に扱われる。むしろ酷いのはお前らだろう。こんなことをされる謂われはないはずだ。
少年達の顔を見て鉄材を握り直す。
何も思わないのか。この世界の、国の常識が間違っている、歪んでいるとは思わないのか。
同じ人間だろう。
持っていた鉄材を相手に投げつけた。
丁度俺に鉄材を投げつけてきた奴の頬を掠める。
「何す…っ！」
近寄って相手の手を握る。
「触るな…っ！」
鉄材が食い込んでいる手を握らせた。さらに鉄材が食い込んでくる。
痛みも、何も感じなかった。ただ、怒りのみがそこにあった。
「ひっ…！」
息を呑むような悲鳴と共に相手が手を引っ込めようとした。
さらに強く握らせる。
俺の血が相手の手の平にべっとりと付いた。
思い知ればいいと思ったのだ。同じ血が流れているということをわからせてやりたい。同じように生きているのだ。
「志紀、落ち着いて」
綾が俺の手を掴んだ。
相手が一瞬ホッとした雰囲気になる。ようやく解放してもらえる――
――そんな表情。
「離して、志紀。これ以上酷い怪我になったらまずい。手が使えなくなるかもしれない」
しかし、綾の言葉に相手がムッとした雰囲気に変わった。
綾があからさまに自分達ではなく俺の手のために俺を宥めた、とい

うことに怒りを覚えたのだろう。
それに気づいているだろう綾は相も変わらず無視して俺の手を掴んでいる己の手に力を入れた。
俺が動かないのを見て小さく溜め息を吐く。
綾が一本ずつ俺の指を解いていくのを、俺は黙って見ていた。解き終わると綾は少年達を見ていつの間にか集めていた鉄材を足元に投げた。
少年達が悲鳴を上げる。
綾はそれを一瞥して俺の手を引いて家の中に入った。

「うわ、かなり深いな。痕、残るかもねぇ」
ソファに座って俺の手の平から鉄材を抜き取ると綾は少し顔をしかめた。
「……気持ちはわからないでもないよ。でも志紀、忘れちゃいけない。あいつらには何をしても意味はない。分かり合えない。だから俺達はここに来たんだろう」
水を溜めた桶に手を浸して血を流す。水に血が解けていく。
「……忘れてたわけじゃ、ない。ただ…」
「……ただ？」
答えられずにいると溜め息を吐いてからちょこっと綾は笑った。
「わかってるよ。どうしても、許せなかったんだろ」
清潔な布で綾が俺の手を拭っていく。
「……よくわかったな」
そうか、そうだな。と、その言葉がストンと胸に落ちた。
俺でもわからなかったことをさらりと言ってのけた。
「そりゃ分かるさ。君はわかりやすいからね」
再び血の滲んだ傷痕を酒に浸した脱脂綿で拭って包帯を巻いていく。
背もたれにゆっくりと頭を預けた。
それはそうと、と綾が思い出したように口にした。
「志紀、部屋分けようか」

綾が救急箱を片付けながら言った。
「…なんで。別にいい」
最下層では1つの部屋を5～6人で使っていた。俺は和貴と2人で一番狭い部屋をあてがわれていたが。
今更誰かと部屋を分け合うことに何か思うようなことなどない。
「やめとくべきだね。俺の裸、すっごいよ。君のそのクールぶってる仮面の下を見せたくなかったらやめといた方がいい」
ニヤリと綾が笑う。
想像しようとして止めた。すっごい裸がどういうものかわからない。
まぁ、こいつはただの背主だ。知られたくないことも互いにあるだろう。
ならば無理に干渉しなければいい。
「…わかった。俺は右の部屋をもらう」
「了解～」

皮膚を裂いた物（後書き）

やっと第2層っぽい場面が！
次回、ようやく朝廷！

会試（前書き）

日が…空きましたね…

会試

――――数週間後、官吏になるための試験の一つ、会試が行われた。
不正防止のためにあらかじめ用意された衣服を着る。
自分の持参品はすべて別室のロッカーに入れた。
会場に持って行けるのは己の身一つ。筆記用具や時計の何もかもが用意されているのだ。
綾はフードがないから顔を隠せない、と唇を尖らせていた。
会場に入ると既に大勢の受験者が入っていてざわついていた。
「今年は最下層からの受験者がいるらしい」
「なんと生意気な」
そういった言葉が飛び交う中を自分の机に向かって歩いていくと不意に誰かに肩を掴まれた。
振り返ると見知らぬ男がニヤニヤと卑しい顔で笑っていた。
「何か」
「見ない顔だな。どこの家の者だ？」
「……生憎、貴族じゃない」
さらに卑しく男が笑う。その後ろにいる背主らしき男もニヤニヤと笑っていた。
ただの格差差別か。
舌打ちをして手を払うと男が俺を指差した。
「お前とその隣の奴、もう一度持ち物検査をしてこい」
「は？」
綾が鋭く睨む。これほどとないまでに冷ややかさを帯びている。
それに気づかないのか男はふんと鼻を鳴らした。
「どうせ平民でも下の方なんだろう」
「……そうだとして、それが、どうかしたか」
「どんな性格をしているかわかったもんじゃない。賤しい身の上では何をしてはいけないかなど理解できないだろう。カンニングをさ

れてはたまらないからな」
ピクリと眉を動かす。
「はぁ？」
呆れたように綾が溜め息を吐いた。
「ねぇ、ちょっと、こいつバカなんじゃないの」
バカだ。この場でそんなことを言うなんて本物のバカしかいない。
「何？」
男が怒りを隠そうともせずに声を荒げる。
「あんた、バカか。今は学舎の試験じゃない。科挙の中の会試なんだ。衣服まで配布されて、机と机の間には分厚い板が打ちつけられているのに、どうやってカンニングするんだよ。礼部をバカにしてる」
男がハッとしたように青ざめる。
綾が酷薄な笑みを浮かべた。
「あっれーお兄さん、それじゃあ朝廷を無能扱いしてるんだ？」
「違う！」
「いやぁバカにしてるね。すごいね、俺にはそんな勇気ないよ」
下から覗き込むようにして綾が男を見上げる。
ゾッとするほど、感情のこもっていない目に目が釘付けになる。
「ぼっ、僕を脅すつもりか！？僕は貴族だぞ！！」
「はいはい。お偉い、お偉い、考えなしな貴族のご子息様。これからは口に要注意ですよ」
男の顔が紅潮した。
「なっ――――」
「何をしている」
入り口で声がしてそちらに目をやる。
官吏服を着た男がこちらを見て立っていた。
試験官か…。
「な、なんでもありません！！」
試験官に向かって男がすごい勢いで頭を下げる。

「早く席に着きなさい。試験を始める」
「はいっ」
しばらく試験官を見ているとそれに気づいて俺を見た。一瞬興味深そうに眉を跳ね上げる。
「何をしてる。君も席に着きなさい」
「……はい」
席に着くと問題用紙が配られた。
「始めっ！！」
ずらずらと並んでいる問題を解いていく。最後の問題で手を止めた。

――――最終問題　何故官吏になりたいのか理由を答えなさい。

本当の理由を書いたら、真っ先に落とされて、最悪殺されるな。
溜め息を吐いたペンを置く。
でも、適当にでっち上げるのは癪に障る。
だいたいこんな風に差別があるのがおかしい。最下層出身ってだけで落とされるかもしれない。
奥歯を噛み締める。
ふと顔を上げると試験官と目があった。
何故かずっと見られていることに少し前から気付いていた。
こいつもどうせ最下層だからと見下しているのだろう。
心の中で舌打ちをしてペンを取る。
ならば、対抗してやろう。
解答用紙にペンを走らせた。

会試（後書き）

次は、殿試！

殿試（前書き）

台風、すごいですね。皆さん大丈夫ですかー？外出の際はお気をつけて！

殿試

その3日後、殿試が行われた。
殿試は口頭試問で、朝議（会議）の間にて皇帝が行う。
「――――では次、加瀬（かぜ）　綾」
「はい」
綾は名字を、まだ両親が生きていた頃のを名乗ることにしたらしい。
だけど俺は両親の顔も名前も知らないので、適当に作った。
流れは跪拝し、皇帝が質問を出してきたら回答。そうでなければ軽い会話からの口頭試問。
「よろしい。下がれ」
その言葉になんとなく下げていた目線を上げる。
大勢の前で口頭試問を特に緊張するでもなく終わらせた綾は、変わらず悠々とした足取りで受験者席に帰ってきていた。
俺の視線に気付いた綾がニヤリと口を歪め片目を瞑る。
バッチリだと言いたいらしい。
小さく頷いてみせる。
「次、真壁　志紀」
「――――はい」
立ち上がって最高礼の跪拝をする。
「面を上げよ」
顔を上げると下手をすれば国王よりも豪華な椅子に〝皇帝〟が座っていた。
官吏は、官吏である証拠に、それぞれの所属する三省六部の色の石がついた白銀の鍵型のチャームを胸につける。しかし皇帝は、他の官吏とは形が異なる。
――――黄金の鍵型のチャームに王冠が絡ませてあるのだ。
皇帝の、証。

知らずにドクリと心臓が音をたてた。
その皇帝の後ろに会試の時の試験官が立っている。
いくつか会試と同じような質問をされた後、ふと試験官が身じろいだ。
目だけを動かして見ると向こうもこちらを見返してきた。
微かに笑っているように見える。
眉を顰めて睨み返すと皇帝が咳払いをした。
「そなたは会試の最終問題、なかなか興味深い回答を書いていたな。あれの意味とは？」
視線を戻して皇帝を見上げる。
「――――畏れながら申し上げます。あれは言葉そのままでございます。他に意味などございません」
周りが騒然となった。
皇帝が手を上げてそれを制す。静かになったのを見計らってから皇帝は俺の目を見つめた。
逸らすことなく、しばらく見つめ合う。
「……ではそなたが望むのは何か」
「…そうですね。たった1つ、あります。が、陛下のお耳に入れるほどのものではありません」
俺が欲しいのはたった1つ。
――――お前の座る、その王座。
「…そうか」
皇帝が試験官に合図をする。
「では次――――」

「志紀、君、なんて答えたわけ？会試で」
「別に」
「気になるよ！！もしかしたらそれで落ちるかもよ？」
合格発表の間へ歩いている廊下の途中で綾が噛みつくような勢いで

問うてきた。
ピタリと止まって綾の顔の高さまで屈む。
「な…何」
「科挙は一応実力主義だ。んなわけあるかよ」
「わかんないじゃん。俺、君に落ちられたら困るんだよ」
フードから見える口が尖る。
「言えよ、志紀」
手を伸ばして頬を抓った。ビクッと綾が跳ねる。
「うわっ…」
「内緒」
手を離して歩き出す。
綾は後ろからぶつぶつ文句を言いながら付いて来た。
合格発表の間には大きな紙が張り出されていた。
一番成績がいいのが状元（じょうげん）、次が榜眼（ぼうげん）、その次が探花（たんか）と呼ばれる。
肩を落として出て行く者や嬉しそうに笑って話している者もいる。
その中でどよめきが広がった。
「嘘だろ…」
「マジかよ…」
そういう声がちらほらと聞こえる。
綾と顔を見合わせて人だかりの中を進むと俺達の顔を見るなり道ができた。
誰もが驚愕した顔で俺達を見ている。
眉を顰めると綾が俺の後ろから顔を出した。
「何事？まさか宮中内で襲われるわけ？」
「…おそらく、違う」
さらに進んで紙を見て自分達の名を探す。

『状元　真壁　志紀』

状元――――。

なるほど、それでか。

『榜眼　加瀬　綾』

思わず目を丸くした。

俺にはじいさんがいたがこいつはおそらく独学。

そのこいつが榜眼とは――――。

「あらら、負けちゃったか。ちょっと自信あったのに。まぁ、仕方ないね」

ニヤリと綾が笑う。

後ろから怒鳴り声が聞こえた。

「お前らカンニングしたんだろう！！最下層で勉強できるわけがない！！」

集団の中の１人が血相を変えてそう怒鳴っていた。

「そう思ってるのはあんた達だけだよ」

綾が冷ややかにそう言った。

「行くぞ」

綾の手を掴んで部屋の外に出た。

殿試（後書き）

次は吏部試！

吏部試（前書き）

新しくキャラが出てきますよー！

吏部試

部屋の外に出ると呼び止められた。
「状元・榜眼、こちらへ来なさい」
見たことのない官吏がこちらを見て止まっていた。こいつが呼んだのか。官吏服は上物、官吏証は赤の鍵。吏部だな。
綾も気付いたのか表情を引き締める。
お次は吏部か。さて、何を言われるのやら。
その官吏に付いていくと1つの部屋に通された。
付いてきた官吏とは別の官吏が中で座っていた。
「これより吏部(りぶし)試を行う」
吏部試とは六部の内の1つ、人事を司るため権は六部の一と云われる吏部が行う試験で、第一に人柄、次に作法や言葉を見る。
これを受けなければどの部にも配属されず、官位がもらえない。つまり、無職のままだ。
「明後日に行うと聞いていましたが」
「君達のみ先に執り行うことになった」
俺達だけ？
ピクリと指が動く。
「…そうですか」
「では、加瀬進士※は左へ、真壁進士は右へ」
言われた通りに立つと俺と綾にはそれぞれ別の試験官がつくようで仕切りが置かれた。
気づかれぬよう身構える。人の目がなくなったのをいいことに襲ってくる奴など腐るほどいた。
「では、戸部の蔵に金が余っているとする。上限はなしとして、真壁進士、あなたは何に使う？」
「……そうですね。まずは工部に振り分け医師の育成にあてます。研究費にもなりますね。食物の栽培技術などを研究するといいかと。

あとは最下層への物品の支給にあてます。奴隷はともかく、その子であること、そして孤児であることによるあの仕打ちは正当ではありません。第2以上の層に孤児や奴隷の子ようの施設を建設するのもよいでしょう」
「最下層への意見が多いですね」
「消せる汚れは消すべきです」
「そうですね…。では次」
跪拝をやらされた。最高礼のものから上官へのものまで一通りやらされると、紙を配られた。
そこに書いてある文章を宮中語（堅苦しい言葉）で読み上げろと言われ、言われた通り読んだ。
「これにて終了とする」
そう言って俺の試験官が退いた。綾との間にあった仕切りが取り払われる。
ひとまず、おかしな問題はなかった。むしろこれでもかというほどキッチリしていた。
「真壁進士、加瀬進士、こちらへ」
呼ばれてそちらへ行くと別室に通された。
「ここで待ちなさい」
綾と2人で部屋に残される。
しかし、おかしい。
吏部試を特例で行うなど聞いたことがない。
「志紀」
綾の言葉に軽く頷いて戸を睨む。
差別絡みか？
でも試験官の胸にはちゃんと官吏証の鍵型のチャームが付いていた。
赤の色だから吏部であることも間違いない。
鍵型のチャームの意味は皇帝の守護。
そんなものの贋作をたかが最下層の差別のために作る奴はいないだろう。

カチャリと戸が開いた。
そちらを見るとさっきとは違う、会試、殿試の時の試験官が立っていた。
胸には紫のチャームを付けている。
礼部か。
顔を見据えるとそいつが手で椅子を示した。
「座りなさい」
「あなたは誰だ」
睨んだまま試験官に問う。
試験官がニヤリと笑って唇がめくれた。
「言わなければ信用できない、ということか」
「……何者だ。まさか宮中内で皇帝さえも騙し、俺達を廃そうとしているわけじゃないだろううな」
試験官から表情が消えた。
そして心底嫌そうに顔を歪める。
「そんなはずないだろうが。ここでそんなことをすれば、後で必ず御史台につかれる」
試験官が椅子に座って足を組んだ。
「私は藤堂　隆弥（とうどう　たかや）。礼部尚書だ」
「尚書――――…」
思わず驚いて顔を凝視した。
尚書とは三省六部の、六部の長官の事を指す。高官だ。
そんな奴がまだ進士の俺達に一体何の用だというのだ。
礼部尚書が気持ちを透かしたように眉を跳ねさせた。
「私が直々に君達に会いに来たわけか？」
「！！」
警戒しているのが面白いのかクククッと喉を鳴らす。
「加瀬進士、真壁進士、２人を礼部に迎えたい」
「……どういうことだ」
礼部は教育・倫理を司る。

学舎へ行かせるなら昔からの平民か、貴族がいいに決まっている。
元・最下層は歓迎されないだろう。
そうなれば礼部の落ち度となる。
もしかしたらずっと進士のままということも、覚悟していたのだ。
おそらくどこからも呼ばれないことを見越して――。
「ただの官吏として迎えるわけではない。――覆面官吏のことは知っているな？」
「覆面官吏…」
隣の綾が小さく呟く。
知っている。
「覆面官吏とは、他の部署に潜り込み、仕事のできる、できないを判断する官吏のことだ。普段の自分とは異なるように見せるため演技だってする。あまり顔は知られないが、一番の出世街道だぞ」
――出世街道。
その言葉に反応する。
「どうだ？あまり日の目は見ないが功績さえあげれば一気に六部の尚書になれることもある」
綾と目を合わせた。
「背主のどちらかは補佐官だがな。それでも尚書と同じくらいの権限は持てる」
「……一番早くて？」
「よほど早い時は2年だな」
2年。確かに、早い。
普通に行けば、2年でようやく官吏として認めてもらえるぐらいだ。
「なぜ、俺達なわけ？」
綾が訝しげに尋ねた。
そう、それがわからない。
相手の利益がわからないまま餌に飛びつくわけにはいかない。
「いい点に気が付いた。貴族の野郎共もガキの頃からパーティーやらなんやらで顔が知られている。あと、素顔のまま別人と認識され

るほどの演技力も持ってないし、死ぬ気でしようとする根性もない。
平民の奴らはどうも日の目が見られないことが嫌らしい。まぁ、あいつらが得意なのは媚びることのみだからな。つまり、一番君達が適任てわけだ」
「今それが必要なわけは」
礼部尚書が黙り込む。
手を叩いて何か持ってくるように命じた。
「――今この朝廷は腐っている。その腐敗した部分を切り取りたいわけだよ。だが、有能な部下は皆出世してしまってね。覆面官吏が少ないわけだ。人手が欲しいんだよ」
戸が開いて男が何か持ってきた。
「あぁ、ありがとう」
礼部尚書が何か受け取って机の上に並べた。
紫の鍵のチャーム。礼部である証。
「さあ、どうする？」
しばらく礼部尚書の目を見つめた。
利害は一致している。
こっちはしばらく表立って行動できないが将来、出世させなければおかしいほど功績を残せば、一気に出世できる。
向こうは、こっちは新人ですぐには思うような結果を出せないかもしれないし、元・最下層だが、人手が手に入る。
綾の目を見て決めた。
机の上のチャームを掴み胸元へつける。
それを見て綾もチャームを掴んだ。
「そうこなくては」
満足そうに言った藤堂尚書を横目に見て戸を開ける。
「信じたわけじゃない」
そう言って部屋を出た。

「流石、手強い」
胸から藤堂は紙を取り出した。
真壁　志紀の会試の答案――――。
最終問題を見て頬杖をつく。

『成すべき事を成すため』

当然と言わんばかりに堂々とした文字で書かれていた。
「是非、手懐けたいものだね」
クククッと笑い声が響いた。

吏部試（後書き）

※進士……試験合格者

次は多分、吏部尚書に会います！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1585u/

王冠の椅子

2011年10月8日19時19分発行